Design Business Network Magazine

FP

デザイン・ビジネス情報誌

エフ・ピー

Fusion Planning

JANUARY 1987-1

NO 10

Milan International Furniture Exhibition

Trendy Shops in New York

特集

ミラノ国際家具見本市／ニューヨーク・ショップ

ミラノからは世界が注目の家具業界注目の的、ミラノ・サローネ速報。そしてNYから最先端トレンド・ショップの数々。

特集Ⅰ　カッシーナ、B&B、ザノッタ……の新作が一堂に!!

世界が注目するミラノ国際家具見本市

特集Ⅱ　今、ニューヨーカーの話題を独占するホット・スペース

サクセス・ショップ・ストーリー

海外
デザイン事務所
訪問

仏デザイン界で台頭著しい リュバン兄弟率いるカナル

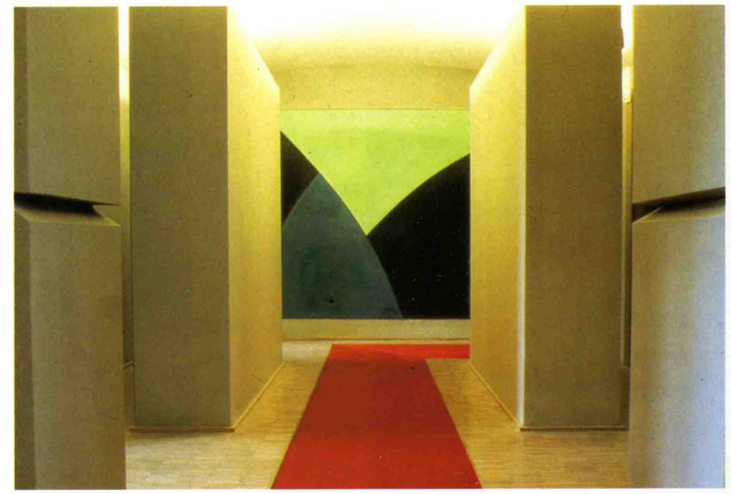
カナル、今フランスで最も注目を浴びている建築・デザイン界のニュー・ジェネレーションだ。今回はパリに飛んで彼達のオフィスを訪ね、その活動を現地取材した印象記である。

パリ第7区にある18世紀の建物、CNLの改装を手がける。

仏デザイン界のニュー・ジェネレーション

とにかく不思議な連中だ。名前の由来はパリのサン・マルタン運河（カナル・サン・マルタン）。そこは元の彼達の事務所があったところだ。「フィリップ・スタルクだけがフランスのデザイナーではない。若くて実力のある連中は他にもいる。」メンフィスをやっているマルティーヌ・ブダンに聞いたら、今若手のナンバー・ワンがカナルだそうだ。

早速会いに行ってみた。雰囲気が優しい。ガーファンクルみたいないい顔をしている。兄のパトリック35歳、弟のダニエル32歳のリュバン兄弟と、アニー・ルボーという名の妹分がいる。彼女はもともとパトリックが教えていた建築学校の生徒だったそうで、仕事を手伝っているうちにいついてしまったらしい。静かで楽しい、そんな雰囲気が人を魅きつけるのだろう。



CNLの廊下

今の事務所は、パリの家具屋街フォーブール・サンタントワーヌ通りのど真中にある。しかし、通りに面した入口には何の看板も出ていない。扉を開けて中に入ると中庭があって、「ACTUEL」と斜めに大きく書かれたサインが出ている8階建ぐらいの建物が立っている。ここはパリの雑誌「アクチュエル」の編集部が入っている。そのオフィスもカナルの仕事の一つだ（インテリア・アーキテクチュア、1981年）。屋上に出ると、吹抜けの天井がガラス貼りのサンルーム風になっていて、吹抜けを上からのぞける小さな展望台がわざわざついている。のぞいてみると、白いバルコニーの曲線がふわっと漂っている。

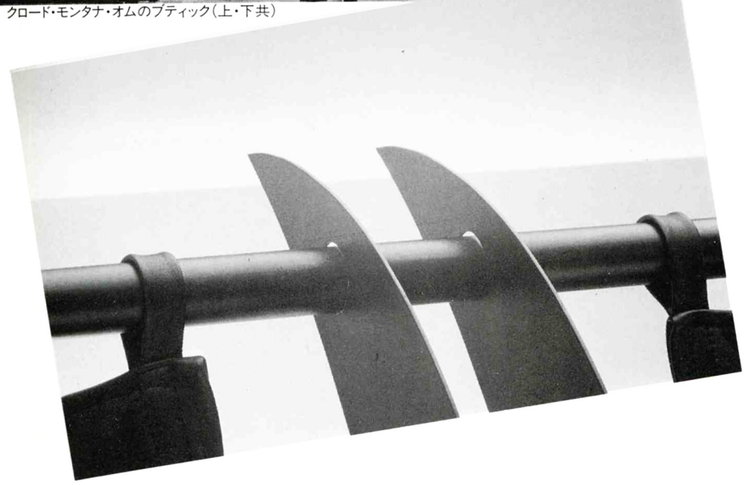
ダニエルが屋上に案内してくれた。パリの街が360度見える。近くに見えるのはバスティーユ広場の塔。雨ざらしの、ペンキのはげた安楽椅子が置いてある。気分のいい日は屋上で日向ぼっこ。裸で寝転んでいても誰からも見えやしない。どこからか工事現場の音が聞こえる。「パリは変わっているんだね……。」とダニエルがつぶやく。

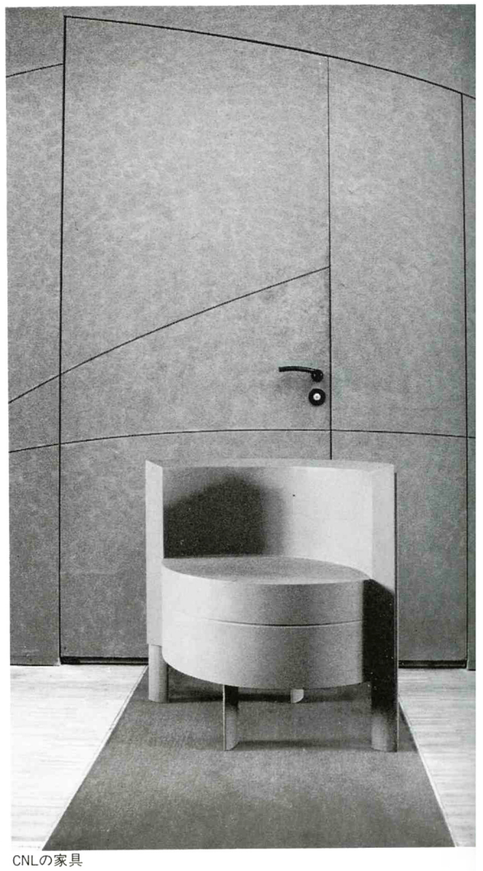
パリ カッシーナ社のショールームでの個展
ソファー、カーペット、照明器具デザインの展示

クロード・モンタナのブテックは、カナルが担当している。写真上からパリ第8区のクロード・モンタナ・オム、第7区のクロード・モンタナ・オム、第8区のクロード・モンタナ・ファム。

フランス文化省の待合室〔写真下〕とソファー〔写真右〕

クロード・モンタナ・オムのブティック（上・下共）





CNLの家具

ットウル）は18世紀の建物の改装（1984年）。グリーン、テアトロの赤、金、色や光を次第にぼかすパステル・カラー。当時のカラーを再発見。「失われた時を求めて」、「時代を超えたデコレーションの再構築」。2年間かかってこのプロジェクトの研究をした。毎日、現場の職人達との対話に出かけた。

アミローやボントワーズの古いスイミング・プールの改装、水中アコースティックの採用。プジョー自動車会社社屋のカラー・コンサルティング。多数の公共建築とインテリア・アーキテクチュア。元文化大臣ジャック・ラングの依頼で公共の仕事も多い。古い建築のリフォームは枚挙にいとまがない。ミュージアム・インテリアにショップ・インテリア。家具・カーペットのデザインにアーバン・ファーニチャーのデザイン。1985年、パリ第13区のメディアテック・ライブラリーの建築コンペに優勝。なめらかな、クリーンなデザインへ……新たなる飛躍。

「失われた時を求めて」から、「現在の時を求めて」へ。

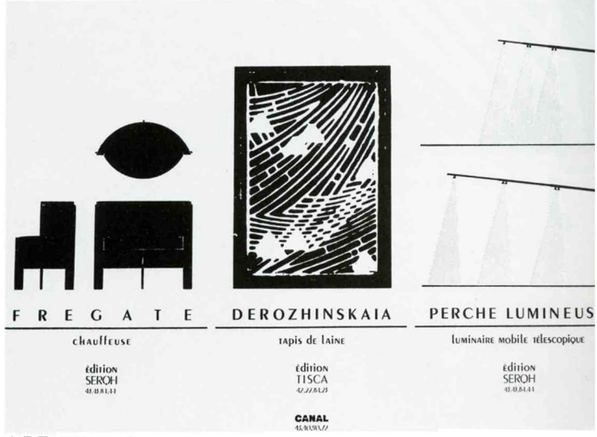
取材・文　上野真一

写真左よりダニエル，パトリックのリュバン兄弟とアニー・ルボー

CANAL
ARCHITECTURE
DECOR
GRAPHISME

カナルのシンボルマーク

CNLのバー



家具展のパンフレット

イスになっている。エントランスの床材は、デビューの頃よく使った彼らのオリジナル・マテリアルで、ぴかぴか光る金属片が入った特殊なものだ。ロフトでもなく、機能的で冷たくない空間。プロジェクトを考える時、巨匠や偉大な建築作品は参考にしない。興味があるのは、人間、現実、生き方。エクセスでもなく、クォーテーションでもない、極めてインティミストなインテリア・アプローチ。1982年、アンドレ・プットマンが彼達にクロード・モンタナを紹介した。それ以来、全世界のモンタナ・ブティックはカナルが担当している。パリ、ロスアンジェルス、東京……。彼達のトレードマークともなった「カナル・ブルー」と呼ばれる美しいフルーレスント・ブルー。マテリアルはガラス、鏡を好んで用いる。ディテールとマテリアルへの愛情、オリジナルな建築言語。

プロフェッショナル集団のカナル

事務所設立は1972年。まだパトリックが学生の時だ。1978年、弟のダニエルが加わった。1981年アニーが参加。現在、スタッフは12名、建築、フォトグラフィー、アート、ジャーナリズム、デザインのプロフェッショナル達だ。従って活動は、建築設計、インテリアデザイン、グラフィックデザイン、プロダクトデザインとクリエーティブ全般に及ぶ。

ニュー・ジェネレーション。1980年代の実力派。建築＋デザイン＋グラフィック＋イメージのミックス。雑誌「イントラムーロス」の表現を借りれば、それはア・ラ・モードであり、トラディション。美しいデコレーション、ハイパー・ソフィスティケーティッドのディテール。その表現は、現在と過去の中道。マニエリスムとモダニズム。「内」と「外」。CNL（サントゥル・ナショナル・デ・レ